

名 称	神河町子どもの居場所づくり推進協議会
所 在 地	〒679-3116 兵庫県神崎郡神河町寺前64
連 絡 先	TEL : 0790-34-0969 FAX : 0790-34-0645

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 神河町 13,484人

本神河町は、兵庫県のほぼ中央に位置し、平成17年11月7日に旧神崎町と旧大河内町の2町が合併し生まれた新町である。合併はしたものの、その人口は県下の合併後の町としては最小規模となっている。地理的には、古くから県の南北を結ぶ交通の要所として、また、町域の大半を占める山林を利用した農林業を基幹産業として発展してきた。近年では、水力発電所や工業団地の開発、観光施設の整備や特産品開発が進むなど、恵まれた自然環境と交通条件を活かした地域振興が進められてきている。豊かな自然や農産物、多数の観光資源、文化・スポーツ施設を有するなど、心の豊かさを育むための環境も充実している。また各集落における住民主体の自治活動も活発に行われており、教育に対する関心も高く、各校区において（小学校9，中学校2）学校行事等教育面において大変協力的である。現在「神河町長期総合計画」を策定中であり、その中で、家庭・学校・地域・行政が連携したまちづくりへのための施策を積極的に進めていくよう検討している。

コーディネートした事例の名称、概要、特色

名称 ふるさと文化再発見アクションプラン「文化活動体験教室」

概要

子どもの居場所づくり推進協議会と文化協会登録サークルとが連携し、町内の小中学生及び一般住民に技能の習得、あるいは製作や演奏に挑戦させる体験活動を、中央公民館を含む町内の各施設において実施した。

体験活動の内容としては、コマ回し、紙飛行機、お手玉等で遊ぶ昔遊び教室、Excelを使ってお絵かきをするパソコン教室、地元で掘り出した粘土でマグカップや皿などの作品を作る陶芸教室、日本の伝統楽器でなじみのある易しい曲を弾く大正琴教室、四季折々に咲く地元の花を使った押し花教室、廃油を再利用した環境に優しいエコキャンドル作り教室、地元

の伝統芸能である「おおかわち太鼓」の和太鼓教室、体に良い食べ物を自分で考えながら作る料理教室の計8教室を7/26～9/4にかけて夏休みを中心に開催した。

昔遊び教室では、該当するサークルがないことから、地域の有志の方を指導者として招き、指導していただいた。コマ回し、紙飛行機、お手玉、あやとり、ゴム跳び等男女の枠を超えた遊びを用意してくださったので、参加者も自分の興味ある遊びをいろいろと体験することができた。普段家庭ではほとんどすることのない遊びでも、ゲームに慣れ親しんだ児童にとっては新鮮であり、非常に楽しんで活動に参加していた。

パソコン教室では、パソコンサークルのお世話により、作画の基本操作として、立体、グラデーション、陰影の付け方等を練習する活動を行ったが、小中学生だけではなく一般の参加もあり、パソコン技能習得のニーズの高さを感じさせた。

陶芸教室では、文化協会所属の陶芸教室のメンバーが指導者となり、仕上がった作品を焼き上げる必要から、普段活動を行っている陶芸教室の会場で行った。親子での参加も複数組あり、自分の思う形のカップや皿作りの創作活動に取り組んだ。

大正琴教室では、大正琴サークルの方々にお世話になり、耳慣れた唱歌である「さくらさくら」等の練習に取り組み、教室の終了時には、ほぼ全員が弾けるまでになっていた。

押し花教室では、押し花のサークルの方々によって集められた材料を用い、しおりや葉書の作成に取り組んだ。ピンセットで細かな花びらや葉を置いていく作業はかなり神経を使うが、参加者は集中して取り組んでいた。

エコキャンドル作り教室では、地域で環境を考えるボランティア活動をされているグループが主体となり、廃油の再利用でキャンドル作りを行った。廃油にクレヨンで着色し、天ぷら油の凝固剤を使って形を整えるというものであり、参加者が自分の好みの色で色とりどりのキャンドルを製作した。

和太鼓教室は地元の伝統芸能である「おおかわち太鼓保存会」が指導者となり、ばちの持ち方の基本から、構え方、叩き方、いろいろなリズムパターンを覚え、最終的には短い曲を参加者全員で演奏するところまでに至った。

料理教室では、地域で食生活改善を通じた健康づくりを進めておられるボランティアグループであるいずみ会のお世話になり、主食、主菜、副菜、汁物、デザートといったバランスを考えた食事作りを体験した。参加者の中には小学校の低学年もいたが、楽しく活動に参加できた。

特色

全てこれらの活動の共通点は、指導者や講師を高額な謝金で町外から呼ぶのではなく、全て町内で活動している既存のサークルや文化協会に登録しているサークルの会員、あるいは町内在住の有志が該当する教室の講師を努め指導に当たっているところである。そうすることで、安価で効率的な運営にもなり、また、児童の文化活動に対する興味関心を深めさせると共に、地域の文化サークルの会員も児童と触れ合うことが新鮮な刺激となり、双方にメリットのある活動となった。また、文化サークルにとっては、会員の確保や、次世代の担い手作りといった目的も大きい。

コーディネートの実際

この事業は平成14年度から旧大河内町で行っていた事業であり、推進協議会としてのねらいは、「公民館に登録されているサークル団体や、文化協会との連携・協力のもとで、児童・生徒が地域文化活動に取り組む機会を提供して、各分野での興味関心を引き起こし地域に根ざした文化意識を高める。また、体験した子どもが地域の文化を見直す機会となり、後継者としての意識付けをねらう。」というものである。

そこで、事業当初の喫緊の課題は指導者の確保という点から、まず文化協会や公民館登録サークルの主宰者の協力を得るべく、説明会を実施した。当時は、子どもが興味を示しそうな「お菓子作り」、「日常英会話」、「絵手紙」、「カメラ」、「手話」、「書道」、「俳句」、「手芸」、「和太鼓」等の教室をこちらから例示し、それぞれ希望の活動を地元住民の指導で行ってもらうというものであった。そして関係サークルの関係者に協力の有無を尋ねた。ここでは思っていた以上に協力を得られたり、この段階で協力を断られた団体もある（子ども向けのプログラムがないことから）が、概して協力的であった。協力を得られる団体には参加者募集のメッセージを依頼し、それをもとにより児童のニーズに沿った教室をという考えから、学校を通じてアンケート協力を依頼し、どの教室に参加したいか、実施曜日の希望等を調査し、実施教室を精選した。

その次年度以降には、町内の有線放送を用いたり、ボランティア募集のチラシを配布したりして、指導者を募ったりしたこともあったが、その方法ではなかなか自ら名乗り出る人も少なく、現在では、説明会を実施する代わりに、文化協会の総会に出向き、時間をいただいて説明をさせてもらう方法に落ち着いている。

教室が確定したら、次に日程調整が必要となってくる。社会教育の一環として行っているため、実施日は土日に限られてくるのであるが、平成16年度までは主に11月を文化活動月間のようにして集中して行っていた。しかし、平成17年度については、合併を11月に控えていたことから、夏休みを中心に日程調整を行うこととなった。夏休みであれば、児童にとっても平日でも差し支えないため、スケジュール的には余裕ができたが、団体によっては、普段指導を受けている先生にお世話頂くためその先生のスケジュールに合わせたり、平日に仕事を持っている人はどうしても土日にならざるを得ないということもあった。

日程決定後、各教室の参加者募集については、学校（合併前小学校5、中学校1）を通じてチラシを配布すると共に、町内有線放送を用いての告知放送を行った。しかし、塾や習い事、スポーツ活動等児童も多忙化が進んでいることにより定員10～20名の枠がなかなか埋まらないということもしばしばであった。また、町の中心部までの距離が遠いということも要因の一つに挙げられる。親の送迎が得られない児童の中には、参加したくても参加できない児童もあったと思われる。そういった場合、知人や職場の同僚に直接口コミで頼むという方法をとったり、会場を他の町内の公共施設とすることもあった。

各教室での具体的なコーディネートとしては、会場の手配、教室で必要とする教材の手配等がある。

例えば、昔遊び教室の場合、ものを作ることは公民館内の研修室のような室内でできても、紙飛行機を飛ばしたり、コマを回すといった活動は屋外でないと難しい。特にコマの場合は、鉄芯で床を傷つけてしまったり、投げ損じた場合に周囲の壁を損傷する恐れもあるため屋内ではできない。また、平らなところを必要とするため、施設の外回りでもタイルや煉瓦状の

床面では凹凸があつては活動に支障があるため、事前に公民館の玄関前にベニヤ板のコンパネを数枚調達してきて活動スペースを確保した。

大正琴教室では、「人数分の練習琴をレンタルすることができる」と、指導者の方に教えられ、手配し、教室終了後に返送した。

陶芸教室においては作品の完成に時間を要することから、教室の時間内では形を作り上げるところまでとし、焼き上げは、サークルの方に後日お願いするという形をとった。そして焼き上がった作品を参加者の手元に届けるのに直接一軒一軒宅配し参加者の生の声なども聞いて回った。

その他活動中の記録を残すために、各教室ではデジカメで写真撮影を行ったり、教室の受付業務、指導者の方が用意された配布用資料の作成・印刷等も担当した。

事業実施後は、毎回必ずアンケートを採り、その教室の満足度を測ったり、実施時期の可否、次回にはどんな教室を開いてほしいか等次回への課題を明らかにするよう努めている。そして、アンケート結果を学校・指導者に送付し、学校には参加者の反応を知ってもらふと共に、次回の参加へ積極的に働きかけてもらうよう依頼し、指導者には御礼と次回への協力依頼も兼ねた。

アンケートの結果を見てみると、この事業に対する参加者の反応はおおむね好評を得ている。参加して楽しかったのはもちろんのこと、大正琴の教室においてはその体験活動から発展してその後に予定されていた町の文化的行事である芸能発表会に出演するところまで話が進み、継続的に練習に参加する児童も現れた。また、活動の内容として、形として残るもの、上達が自分で分かるもの等達成感が五感を通して得やすいものは、参加者の満足度が高いことが分かった。

また、指導者側からも「教室後は子どもたちからの挨拶の声が増えた」、「それまで気にならなかった通りすがりの子どもにも目を配るようになった」等、地域として子どもを育てる土壌が醸成されつつある。

今後の課題としては、合併後の実施ということになるため、実施エリアが広がることとなるが、旧神崎町では行われていなかった事業であるため、統合された文化協会にこれまでの事業の経緯や意義、そこから波及する効果を説明し働きかけ理解を求めることで、これまで同様の協力を求めることとなるであろう。地域が広がることでこれまで以上に地域の豊富な人材を得ることができるかもしれない。また、課題として参加者の確保という点では、地域が広がることにより、これまで以上に多くなるかと言えばそうとも限らず、遠隔の参加者は相変わらず存在することとなるため、旧町レベルでの開催を行ったり、同じ教室でも町内の様々な会場に分けて行ったりと、参加者が参加しやすいような便宜を図ることがこれまで以上に重要になってくると思われる。



エコキャンドル作り



パソコン教室



押し花教室



陶芸教室

執筆者職・氏名：神河町教育委員会 社会教育課派遣社会教育主事 中正 達也